



昨年末の「磨光」は俵万智さんの短歌で終わりました。年初めも俵さんの短歌で。

寒いねと話しかければ寒いねと答える人のいるあたたかさ

こ
白く凝った息を吐きながら子どもたちが登校してきます。「寒うー」「寒いなあ」。言葉を交わします。息が白いのは私たちの体があたたかいという証。そこに、「答える人のいるあたたかさ」が重なります。昨日は、校庭に雪がちらつきました。きっと瑞雪です。

二つの歌と出あって ～40年前の歌・今の歌～

1月8日の始業式では、二つの歌を紹介しました。

一つは童謡「小さい秋 見つけた」です。私が17歳の時、高校の書道の時間に、この歌詞を書の作品にしました。結構気に入った作品だったのですが、その後、行方知れずになり、てっきりもう捨ててしまったものと思っていました。

ところが、昨年11月、私が実家に行ったときに父が、「これ、覚えてるか？」と、この作品を棚の奥から出してきてくれました。およそ40年もの間、大切に保管しておいてくれたのでした。

子どもたちには、2学期の終業式で、「いつも自分のことを考えてくれている家族への恩返しとして、『家族孝行』をしましょう」という宿題を出しました。でも、家族の大きな恩に対する自分の孝行など、なんとちっぽけなことでしょう。この「40年」を思い返して、そう思ったのでした。

だからこそ、子どもたちには、これからも少しでも家族孝行を続けてほしいと願っています。

もう一つの歌は、AKB48の「365日の紙飛行機」です。この歌とは昨年末、街中で出あいました。ふと流れてくる歌のメロディーと歌詞に妙に心惹かれ、隣にいた知人に「これなんていう曲？」と尋ね、曲名を教えてもらいました。

人生は紙飛行機 願い乗せて飛んで行くよ
風の中を力の限り ただ進むだけ
その距離を競うより どう飛んだか どこを飛んだのか
それが一番大切なんだ さあ 心のままに 365日
(AKB48、「365日の紙飛行機」より)



冬休み中、来校したお客さんが帰り際に玄関の書道パフォーマンスの作品を見て、「数字に現れないことに頑張るのって、いいよね。」とつぶやかれましたが、この歌に通じるものがあります。「飛んだ距離」は測ることができます。優劣も決まります。でも「どう飛んだか」「どこを飛んだか」に数字は似合いません。

365日の始まりです。どこを飛んで行きましょうか。どう飛んで行きましょうか。

始業式で話せなかった話

「365日の紙飛行機」とは偶然の出あいでした。もしあの時に、あの場所でいなかったら、この歌と出あうことはなかった。喧噪の中でやり過ごしていれば、ずっと、この曲を知ることもしなかったかもしれない。そうすると、3学期の始業式で子どもたちにこの歌を伝えることもできなかった……。

どんな出あいが、自分の人生を変えていくのか、自分の人生を豊かにするのか、自分では分かりません。もし、あらかじめ「大切な出あい」「そうでない出あい」が分かっていたら、おそろかにしてしまう出あいが生まれてくるでしょう。だからこそ、人は、どんな出あいが大切にならなければならないのだと思います。

新しい小さな日々の出来事との出あいを大切に、新しい年を歩んでいきます。

今年もどうぞよろしくお祈りします。